＜別紙１＞

第三者評価結果報告書

①第三者評価機関名

|  |
| --- |
| 株式会社第三者評価機構　神奈川評価調査室 |

②施設・事業所情報

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 名称：わさび | | 種別：共同生活介護 | |
| 代表者氏名：平林　光 | | 定員（利用人数）： ５名 | |
| 所在地：神奈川県川崎市多摩区登戸新町174 | | | |
| TEL：044-819-5206 | | HP：<http://www.nagomi-fukushi.or.jp/ayu-kobo/grouphome.htm> | |
| 【施設・事業所の概要】 | | | |
| 開設年月日　平成２７年４月１日 | | | |
| 経営法人・設置主体（法人名等）：社会福祉法人なごみ福祉会 | | | |
| 職員数 | 常勤職員： ３名 | | 非常勤職員 ２９名 |
| 専門職員 | （専門職の名称） | |  |
| 生活支援員１名（３兼務） | | 生活支援員（１９兼務） |
| サービス管理責任者（２兼務） | |  |
| 施設・設備  の概要 | （居室数） | | （設備等） |
| ５室 | | 浴室、食堂、トイレ２ |

③理念・基本方針

|  |
| --- |
| (1)理念  共に生き、共に育つ  　障がいの有無に関わらず地域であたりまえの生活を  (2)基本方針  1)わたしたちはすべての人の尊厳、生きる権利を重んじ、障がいや疾病を理由とした差別のな  い地域社会を目指す。  2)一人ひとりの多様な個性を認め合い、障がいの有無に関わらず共に生活ことを通して共に育  つことを大切にする。  3)障がい児者が地域で安心して生活できるよう支援し、環境の整備に努力する。地域諸団体の  行事への参加、地域の企業や商店街との結びつき等地域との連携に努力し、障がいを持った  人たちの存在の認識を地域に広げる。  　4)一人ひとりの特性、特技を生かす活動を通して、喜び、感動を共にする。共感する喜び達成  する喜びを通して、信頼関係を築き自分への自信（自己肯定感）を育てる。  5)障害福祉の制度改革や障がい者の権利拡大のために、関係団体と連携し国自治体、地域に働  　　きかけを行う。 |

④施設・事業所の特徴的な取組

|  |
| --- |
| 1. ひとりでは難しいことは職員が手伝い、それぞれの方に沿った自立を模索しながら、地域の中   で暮らしていくことをサポートしている。例えば地域での買い物を奨励する一方で、本人のコントロールが難しい場合は職員が購入して管理している。  2) 日帰りや1泊旅行を行っている（今年度コロナ禍のため延期中、昨年度は日帰りのみ実施）  3) アレルギーや衛生・健康面に配慮した、調理担当者による手作りの夕食を提供している。  4) 体験入所を実施している（今年度コロナ禍のため、緊急時・入居前提の体験のみ実施） |

⑤第三者評価の受審状況

|  |  |
| --- | --- |
| 評価実施期間 | 令和３年９月１５日（契約日） ～  令和４年３月１５日（評価結果確定日） |
| 受審回数（前回の受審時期） | １　回（平成３０年度） |

⑥総評

|  |
| --- |
| ◇特に評価の高い点  １）利用者本位な中にも生活のリズムや健康に配慮した対応があります  昼休みの隙間の時間を利用して戻ってきた利用者が息つく間もなく冷蔵庫に突進して大好きなコーラで達成感満面となる様子を視認しました。冷蔵庫の中は個人のものをそれぞれ入れていますが、全てに名前が記されているわけではなく、トラブルにならない範囲で利用者本人の掌握力を認めるとともに「好みの嗜好品を過度に摂り過ぎないように補充は職員がおこなう」等異なるセルフケア能力に対応しています   1. 情報が一元化され、サポートが速やかに実現しています   そもそもは職員数が不十分なための対策でしたが、管理者が６棟あるグループホームを統括、サービス管理責任者が一つひとつを巡回することで情報の一元化が成されています。管理者はサービス管理責任者からの昇格で利用者、家族、職員とも馴染みの関係にあり、現任のサービス管理責任者者と職員の支えもあって、利用者や家族の希望や困りごとに速やかに対応することが叶い、内容によっては個別支援計画に反映させています。  ３）職員の価値判断を押しつけず、その人自身が決める権利を尊重しています  「利用者が自己決定をおこなう潜在能力がある」と信じて「自己決定の結論を急がない」姿勢で利用者と向き合っています。モノへの執着が強く布団をやっと買い換えることに実った利用者の居室には変色した枕は未だあり、待つ姿勢とともに適切な情報や方法を提供し、利用者の意思を確認することを粘り強く重ね布団だけでも換わったことが見てとれます。また情報の非対称性を踏まえ、利用者を個別援助の過程に積極的に参加させ、専門職が自己決定のための情報を提供しつづける技術も確かなことが覗えます  ◇改善を求められる点  「わさび」は平成２７年に開設、受審は平成３０年に続いて２回目です。知的障害の男性５名（定員「５名」が生活しており、利用者が生き生きと自由闊達に振る舞う様子に安心感が満ちています。隣接に存在する「わさびⅡ」とは日常挨拶だけでなく、少ないながらも食事の行き来もあるとのことですので、２つの事業所の交流事業があると、なお良いと思います。 |